③株式会社亀井組

（徳島本店：徳島市万代町6丁目20番2）

（鳴門本社：鳴門市撫養町立岩字七枚114）

鳴門市を発祥とする1906年創業の総合建設業「亀井組」は、「人に優しい、地域に優しい、地球に優しい環境づくり」の理念のもと、「グリーンコンストラクションカンパニーへの変革」を

掲げ、太陽光発電やＬＥＤ照明設備など環境分野にも力を入れている。また、先述の特定規模電気事業者（ＰＰＳ）の登録も済ませており、再生可能エネルギーに関する業務の多角化も進めている。こうした中、新たな住まいのカタチである「コーポラティブハウス」を展開し、建築と環境をより融合させた事業展開を進め始めている。

「コーポラティブハウス」とは、複数の入居希望者が建設組合を結成し、建物・共有部分などのハード面はもちろんのこと、まちなみ・景観・コミュニティ形成など、ソフト面についても入居者間で一緒に考える。会員の賛同を得た後に具体的な建設を行い、入居後の維持・管理を続ける形式の集合住宅である。すなわち、一般的な分譲住宅・マンションなどに比べ、入居者間の関係はかなり濃密であり、協力的でなければならない。たとえて言えば、昔よく見られた長屋の住人の間における「みそ・しょうゆの貸し借り」に表される関係性に近いものが必要なのである。高齢化が加速度を増して進む中、こうした隣人との濃密な関係の必要性はますます高まってくると考えられており、逆に時代を先取りしている動きとも言える。

同社は、「Garden ＊ House（ガーデンハウス）」と名付けたこのコーポラティブハウスの第１号として、鳴門市撫養町黒崎において８棟の戸建て住宅の開発を進めている。特徴的なのは、建築・環境設備などを横浜国立大学と共同で開発し、若手建築家による設計を採用することで、環境配慮型住宅であることはもちろんだが、斬新なデザイン・造りとなっている。その特徴の一部を以下で紹介しよう。

・室内は廊下を省いて各部屋を引戸で仕切ることで、家族数の増減など長期的なライフスタイルの変化などに上手く対応できるようにする。
・天井にシーリングファンを設置することで、空気の流れを作り空調効率を高める。
・住宅を覆い尽くす大きな屋根は日差しを効率的に制御する役割を果たすとともに、屋根全面に太陽光パネルを設置する。

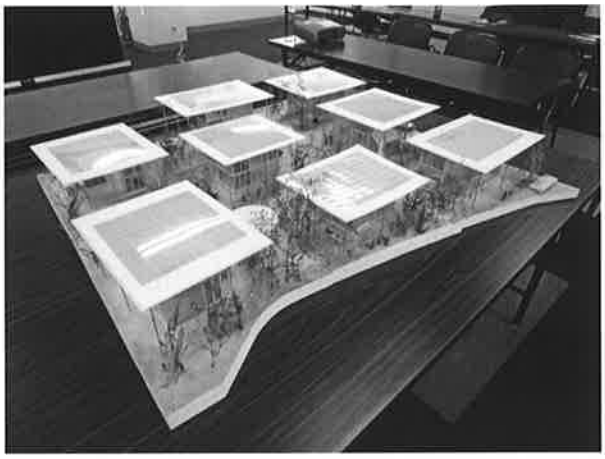

写真７　多くの樹木に囲まれ、太陽光パネル搭載の大型の屋根が特徴的なコーポラティブハウス
（亀井組「Garden＊House」のイメージ）

この太陽光発電の出力は一戸当たり10数kWあり、３～４kW分を自宅用とする一方、約10kW分は売電して、各住戸に面する共有道路「コモンストリート」に植えられた樹木やさまざまな屋外設備などの維持管理費用に充当する。戸建て住宅でのこうした仕組みは他にあまり見られず、非常に画期的である。

通常の分譲住宅とは異なり、コーポラティブハウスの取り組みには、入居希望者の合意形成が必要なことから、完成・入居まで時間を要する。上記事業については、2014年夏ごろまで説明会を随時実施、2015年に入ってから組合の結成とルール作りを行い、2016年５月に完成、というロードマップを描いている。かなりの長丁場であるが、早期の全戸完売に加え、他の地域における「Garden ＊ House」の普及にも期待したい。

おわりに

以上、「スマートコミュニティ」、「電力システム改革」、「太陽光発電」、「スマートハウス」の話題を紹介した。他にも採り上げきれないほどの話題があるが、要は、エネルギーの生産の主体や利用の仕方が劇的に変化しており、私たち

を取り巻く生活やビジネスにもかなり大きな影響を及ぼしている事実がある、ということである。さらに言えば、スマートコミュニティ事業は、この劇的な変化の複合体でもあることを意味しており、これにより思いもよらないような事業者の参入や新たなビジネスが生まれることも想像に難くはない。

気になることは、現在進められているスマートコミュニティ事業の主たる推進者の多くが大企業であり、地場中小企業があまり目立っていない現状である。だからこそ、本稿では県内地場企業を中心に採り上げ、こうした事業者における一歩先取りした取り組みを紹介した。「思いもよらないような」ビジネスが県内地場企業から発生する可能性は決して低くない、と考えているからである。

<参考文献>
・経済産業省 [編]「エネルギー白書 2013 年版」
・井熊均 [編]「2020 年、電力大再編」日刊工業新聞社　2013 年5月
・家入龍太「図解と事例でわかる スマートハウス」翔泳社　2013 年6月